福井大学教育実践研究　1994，第19号，pp. 49－59.

原　著

半期週１コマ型授業を想定した一般教育中国語テキストの制作

福井大学教育学部　村　上　公　一

現在各大学に於いて一般教育改革が進み，外国語科目に関しては様々なカリキュラムが登場している。本学でも履修の基本が週２コマ１年または週２コマ２年から週１コマ１年に変わった。本稿では週１コマ１年で中国語教育の全てが原則として終了する履修課程を対象とした一般教育中国語テキスト制作の試みについて報告する。テキストの形態は前期用と後期用の２分冊とし，前期では発音と基本的な文法事項を学び，後期では前期学んだ内容を実践的な会話の中で定着させていくこととした。つまり半期週１コマ用の教材を発展段階順に２種類作ったことになる。学習時間が短くなっただけ，学習内容を学期ごとに明確にしメリハリをつけるべきだと考えたからである。またテキストは教室の中で使用されて初めてその本当の姿が明らかになるものであるから，筆者が現在どのように同テキストを用いて授業をしているのかも併せて報告した。

キーワード：中国語教育，一般教育中国語，教材

１．はじめに

筆者は昨年下関市立大学の小川郁夫氏と共同で半期週１コマ型授業を想定した一般教育中国語テキスト『１２回で学ぶ中国語Ⅰ』及び『１２回で学ぶ中国語Ⅱ』（以下『中国語Ⅰ』『中国語Ⅱ』と略称）を制作した。[1)]本稿では同テキストの内容・構成及びそれにまつわる様々な問題点について報告する。[2)]半期週１コマ，１年週１コマで中国語教育の全てが原則として終了する履修課程のなかでは何をどのように教えれば良いか，一つの試みの記録でもある。

２．テキスト制作の背景

従来本学の外国語教育（一般教育）は，教育学部では英語，ドイツ語，フランス語，中国語及びロシア語のうち１外国語８科目８単位，工学部では英語８科目８単位及び英語以外の１外国語４科目４単位が必修とされ，中国語の履修課程は以下のようになっていた。

１年（前期）	１年（後期）	２年（前期）	２年（後期）
１（１単位）	３（１単位）	５（１単位）	７（１単位）
２（１単位）	４（１単位）	６（１単位）	８（１単位）

１９９３年度から実施された一般教育改革により，教育学部では英語，ドイツ語，フランス語，中国語及びロシア語のうち１外国語４科目８単位及びその他の１外国語２科目４単位，工学部では英語６科目１２単位及びその他の１外国語２科目４単位が必修とされ，中国語の履修課程は以下のようになった。９０分授業週１コマ当たりの単位数は従来の１単位から２単位に変更されたので，単位数の上では従来よりも増加しているが，授業時間は減少している。

1年（前期）	1年（後期）	2年（前期）	2年（後期）
1ａ（2単位）	2ａ（2単位）	3（2単位）	4（2単位）
1ｂ（2単位）	2ｂ（2単位）		

全体の授業方針は１９９２年２月に行った第２外国語アンケートの結果などから「話す力」と「聞く力」を重視することとした。[3)] １年次は１ａ・２ａを必修科目とし，これと並行して１ｂ・２ｂを選択科目として置く形とした。前者は発音と基礎的な文法事項を一通りマスターし，簡単な日常会話をこなせることを目標とし，従来からの中国語履修者数の動きから予想して各クラスの受講者数が３５名程度になるようにクラス数（全９クラス）を調整した。後者は，前者を受講している学生の中で，より深く自発的に中国語を学びたい学生を対象に発音・会話のトレーニングを中心に授業を行い，実践的な運用能力を身につけることを目標として６クラス開講し，各クラスの受講者数は１５名程度に限ることとした。結果として１ａ・２ａと１ｂ・２ｂを並行して受講する少数の受講者と，１ａ・２ａのみを受講する多数の受講者が存在することとなった。

テキストは必修クラスは全クラス共通テキストを用いることは決まっていたものの，新カリキュラムの最終決定から実施までの期間が非常に短かったため，初年度は前年度に用いていたテキストのうちの一冊を継続して用いることとした。

市販されているテキストは一般に週２コマを前提とし，また２年次まで学習が続くことを想定して制作されている。テキスト自体は，週２コマ１年間で１冊の形よりも，週１コマ１年間で１冊の形のものの方が圧倒的に多く，後者ならば新しい履修課程にも適応できるように見えるが，やはり週２コマつまりもう１冊のテキストを並行して学ぶことを前提としている。初年度用いることとなったテキストも週２コマのうちの１コマにここ数年継続して用いてきたものであった。

履修課程が大幅に変更された以上，新しい履修課程に適応したテキストを選ばなければならないのだが，上に述べたように市販のテキストの中からは見つけ難い。そこで新しく週１コマ１年間で発音と基礎的な文法事項を一通りマスターし，簡単な日常会話をこなせることを目標としたテキストを制作することとした。

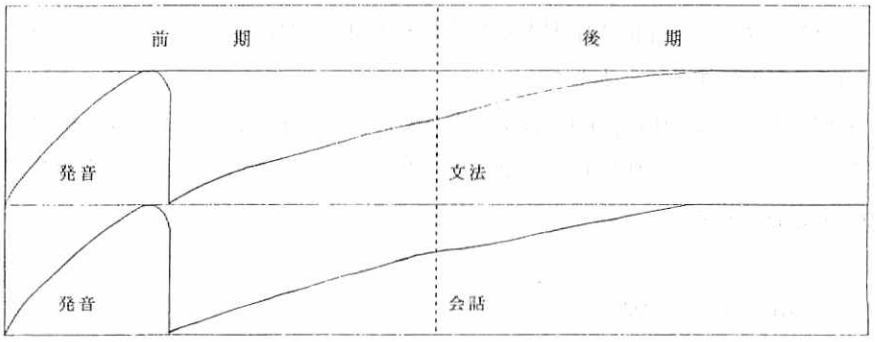
３．テキストの構成

３．１　全体の構成

市販されているテキストには大きく分けて，文法中心型テキストと，会話中心型テキストの２種類がある。前者は，初めの４，５課をピンインの発音練習にあて，その後の１５課から２０課程度は文法事項を系統的に学ぶことを中心に構成されている。文法事項の配列については「名詞述語文」または「動詞述語文」から始まり最後は「複文」で終わるというのが暗黙の了解になっているようである。後者もピンインの発音練習から始まることは変わりないが，その後はおおよそ場面別に構成されている。場面の配置については「初対面の挨拶」から始まり「食事」「買い物」などを経て「送別」でおわるというのがこれまた暗黙の了解になっているようである。前者には一般に学習する文法事項を含んだ会話が添えられているが，あくまでも文法学習が授業の中心となり，中国語の特徴の理解には適当であるが，実践的な中国語会話の習得には難点がある。また，受講者の印象としても１年間通じて文法を習ったという印象が強すぎ，中国語が話せるようになったという実感が伴わないようである。後者にも一般にその課で出てくる文法事項についての説明や練習が添えられているが，日常会話に中心を置くため，実践的な会話を学ぶという点では評価できるが，中国語の全体像といったものを把握しにくいという問題点がある。この欠点を補うべく，週２コマ授業で２冊のテキストを使用する場合は，１コマは文法中心型テキストを使用し，もう１コマは会話中心型テキストを使用することも多い。

週１コマになった現在，どちらの型を中心に据えるかが問題になる。これは年間の学習プログラムをどう考えるかという点につながる。

本学の外国語科目は従来から前期と後期で授業科目が分かれ，単位も別々に出ることになっていたが，実際には前期と後期で同じ教員が同一クラスを担当するように調整し，通年授業と同様に考えてきた。通年用のテキストを使用し，以下のような年間プログラムで授業を行ってきた。



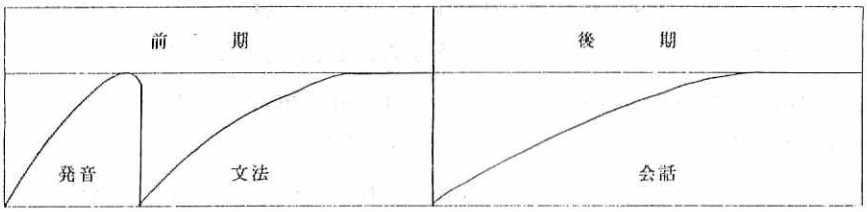
これは１年間でゆるやかに学習していく意味では効果的だったかも知れないが，次のような欠点もあった。

１．テキストの構成が文法中心か会話中心かにより，どちらかに片寄った学習を１年間続けることになる。

2．学生の緊張感が前期までしか維持できず，後期の授業が弛緩することが多い。

3．後期のみ再履修の学生が，通年テキストの後半のみ履修することになる。

特に1は週2コマ制であれば両者の併用ということで乗り切ることも可能だが，週1コマ制では簡単には解決できない。そこでこれらの問題を以下のような年間プログラムを考えることで解決することを試みた。



つまり，学習内容を前期と後期で明確に区分し，前期を発音と文法学習中心とし，後期を会話学習中心とする形である。

前記問題点1については，前期で基本的な文法事項を学習し，後期の会話学習のなかでそれらを定着させていくことになり，一方への片寄りという問題は生じない。問題点2についても，前期と後期の学習目標を明確化することにより，後期での弛緩をかなり防げるのではないか考える。また通年授業の後期になると同一クラス内でも個々の学生の到達度にかなりのバラツキが生じ，授業に支障をきたすことがあるが，この形だと前期の到達度により後期からクラスを再編することも可能になる。問題点3については特に言うまでもない。

更に次のような利点もある。前期だけ受講しても中国語の基本的内容が学習できるのであれば，興味はあるが時間の関係から1年間通して受講できない2年以上，あるいは大学院の学生にも窓口を開くことが出来ること，更には半期分の授業で完結するテキストであれば，今後夏休みや春休みなどを利用しての集中講義形式での開講や，公開講座などにも利用が可能になる。

以上の点を勘案し，1年間の学習内容を前期・後期で分け，それに合わせてテキストも前期用と後期用の2分冊にすることとした。

1．前期テキスト（『中国語Ⅰ』）は文法中心型とする。発音と基本的な文法事項を学習する。

2．後期テキスト（『中国語Ⅱ』）は会話中心型とする。前期に学んだ文法事項を実践的な会話の中で定着させる。

3．2　『中国語Ⅰ』の構成

まずは全体の構成について。半期の講義回数は15回あるのが原則だが，期末試験で1回減るほか，中間試験の実施，休講等を考え，全12課構成とした。発音篇3課，文法篇9課からなる。

3．2．1　発音篇の構成

まず発音篇3課は次のような構成を取った。

第１課　１．声調（四声）
　　２．基本母音
　　３．子音
第２課　１．複雑な母音Ⅰ（ａ，ｅ，ｏで始まるグループ）
　　２．複雑な母音Ⅱ（ｉで始まるグループ）
　　３．複雑な母音Ⅲ（ｕで始まるグループ）
　　４．複雑な母音Ⅳ（ü で始まるグループ）
　　５．声調符号を付ける位置
第３課　１．変調
　　２．軽声
　　３．声調の組み合わせ
　　４．隔音記号
　　５．儿化
　　<簡体字>
　　<簡単なことば>

通年テキストが一般に４，５課で行っているピンインの発音練習を３課にまとめることにはやはり非常に困難があった。第１課は四声・基本母音・子音を１回で学習するのは負担が多すぎるようだが，ここでは発音を完全に習得するというより，一応理解して以後の授業の中で徐々に定着させていくということを考えた。第２課も通年テキストでは複合母音と母音＋鼻音の２課に分けているものが多い。ここでは「複雑な母音」グループを次のように整理することにより１課で学習することにした。[4)]

１．複雑な母音Ⅰ（a, e, o で始まるグループ）

ai　ei　ao　ou
an　en
ang　eng　(ong)
"eng" の発音は "e'+ng"。
bēi　pāo　mǒu　fèng
gāo　káng　hǎn　fèn

２．複雑な母音Ⅱ（i で始まるグループ）

ia(ya)　ie(ye)
iao(yao)　iou(you)
ian(yan)　in(yin)
iang(yang)　ing(ying)　iong(yong)
"iou" は子音と結合する場合は "子音+iu" と表記。
"ian" の発音は「イエン」。
diē　tíng　niǔ　liàng
jiā　qiǒng　xiǎn　xiào

３．複雑な母音Ⅲ（u で始まるグループ）

ua(wa)　uo(wo)
uai(wai)　uei(wei)
uan(wan)　uen(wen)
uang(wang)　ueng(weng)
"uei" は子音と結合する場合は "子音+ui" と表記。
"uen" は子音と結合する場合は "子音+un" と表記。
"ueng" は子音とは結合しない。発音は "u+'e'+ng"。
zhuā　chuáng　shuǎi　rùn
zuān　cuó　suí　wèng

４．複雑な母音Ⅳ（ü で始まるグループ）

üe(yue)
üan(yuan)　ün(yun)
"j, q, x" と結合する場合は "ü" を "u" と表記。
yuān　yún　nǚ　lüè
jū　qué　xuǎn　xùn

第３課は通年テキストでも一般にピンイン学習のまとめとして１課で学習されている内容のもので，特別に新しい工夫はない。第２課まではピンイン学習に専念してほしいとの考えから一切漢字表記は添えてない。しかし，第３課の変調やピンインの組み合わせは既にまとまった意味を持つ語または語句を発音するものなので，イメージしやすいようにピンインの後または下に［　］で漢字表記を添えた。練習問題は，第１・２課はピンインの音読と聞き取り，第３課はピンインの聞き取りと自分の姓名のピンインを調べ発音し，“您貴姓？／我姓□□．”“你叫什么名字？／我叫□□□□．”の形の対話を練習するものとした。

３．２．２　文法篇の構成

続く文法篇９課は次のような構成にした。

第四課　你是学生吗？ ―――― Nǐ shì xuésheng ma？
・ポイント・１．動詞“是”を用いる文　２．人称代名詞と指示代名詞　３．“的”の用法　４．副詞

第五課　今年一九九几年？ ―――― Jīnnián yī jiǔ jiǔ jǐ nián？
・ポイント・１．“是”を用いなくてもよい文　２．年，月，日，曜日，時刻，年齢の言い方　３．年，月，日，曜日，時刻，年齢の尋ね方

第六課　你好吗？ ―――― Nǐ hǎo ma？
・ポイント・１．形容詞を用いる文　２．程度を表す副詞　３．形容詞を用いた複雑な文　４．時を表す語

第七課　你去哪儿？ ―――― Nǐ qù nǎr？
・ポイント・１．場所を表す代名詞（疑問詞を含む）　２．動詞を用いる文　３．連動式文　４．介詞

第八課　你有兄弟姐妹吗？ ―――― Nǐ yǒu xiōngdì jiěmèi ma？
・ポイント・１．量詞　２．動詞“有”を用いる文

第九課　你吃午饭了吗？ ―――― Nǐ chī wǔfàn le ma？
・ポイント・１．文末の“了”　２．動詞の後ろの“了”　３．動詞の後ろの“过”　４．語気助詞“呢”“吧”“的”“啊”

第十課　你会说汉语吗？ ―――― Nǐ huì shuō Hànyǔ ma？
・ポイント・１．助動詞“会”“能”“可以”　２．心理活動を表す動詞　３．程度を表す副詞との併用

第十一課　让你久等了 ―――― Ràng nǐ jiǔděng le
・ポイント・１．使役　２．受け身　３．“为什么”と“怎么”　４．比較　５．選択疑問文

第十二課　下雨了 ―――― Xià yǔ le
・ポイント・１．存在や現象を表す文　２．動詞の後ろの“着”　３．進行を表す副詞“在”　４．主題について　５．方向補語“来”“去”

通年文法中心型テキストが１５課から２０課の授業時間で取り上げてきた文法事項を全て学ぶことは当然出来ない。何を残し，何を捨てるか，そして配列はどうするのか，というのが大きな問題になった。何を基本的な文法事項と考えるかという問題である。ここでは次のような方針で考えた。

１．基本的な文構成のみ取り上げ，複雑なものは学ばない。

２．学んだ文法事項で殆どのことが表現できる。

その結果，「二重賓語文」「兼語式文（使役を除く）」「補語（方向補語“来”“去”を除く）」「複文」をはずすことにした。

「二重賓語文」は「二重賓語文」以外の文型を一通り学び終えた後でないと説明しにくい少し

複雑な文型であることと，文を２つに切って２つの文にして話してもおおよその意味は伝わるという理由から省略した。「兼語式文」もほぼ同じ理由による。「補語」も方向補語“来”“去”を除き全て省略した。「補語」は通年テキストでは一般に「状態補語」「結果補語」「可能補語」を連続する２，３課の授業時間で学習するようになっている。しかし，『中国語Ｉ』ではそのような時間を取れないこと，また「状態補語」はほぼ同じことを２つの文で表現することができ，「結果補語」はとりあえず「連動式文」として理解しておいても入門レベルでは問題がないこと，「可能補語」は微妙なニュアンスに違いはあるものの，可能の「助動詞（能願動詞）」で表現できることにより省略した。

こうしてほぼ９課で学ぶことのできる文法事項が残されることになった。配列は上に示した通り。第４課で「名詞述語文」から入ったのは，具体的なものについて語る文の方が動作・行為について語る文より，導入が容易であると考えたからである。また次の第５課に年月日等の表現を置いたのも，教員と学生の間や学生同士の間で学習事項を踏まえた対話を比較的容易に行うことができる内容であり，中国語によるコミュニケーションをスムーズに開始することができると考えたからである。

３．２．３　各課の構成

各課はそれぞれ，「本文」「新出単語」「ポイント」「練習」「ポイントの新出単語」の５つの部分からなる。「本文」は５対話からなる。５対話は一まとまりの内容を持つようにしてあるが，他の課とは関連を持たない。全てピンインを施した。各課の本文に出てくる新出単語は「新出単語」としてまとめ，ピンイン・品詞・日本語訳を付けた。これは入門段階では辞書を引くことで覚えるより，意味が与えられたものを何度も聞いたり，読んだりして覚える方が効果的だと考えたからである。「ポイント」は簡単な文法説明と例文からなっているが，説明は日本語との対照で覚えることが出来るよう，「・・・（日本語）」は「・・・（中国語）」といった説明の仕方を多く用い，文法的説明は最小限にとどめた。文法事項の詳細な内容を覚えることより，理解は大雑把でも実際に用いることができることを重視しているからである。例文にも全てピンインを加えた。但し，漢字のみを見て発音が出来るように，ピンイン表記はまとめて例文の右側に記した。ポイントで出てくる新出単語も「ポイントの新出単語」としてまとめ，ピンイン・品詞・日本語訳を付けた。理由は「新出単語」と同じ。新出単語の数は本文が各課２２個以内，ポイントが２１個以内，合わせて４３個以内とした。入門時期に１課で学習し得る単語数はこの程度であろう。使用単語数は文法篇で２９６個となった。「練習」は中国語訳か聞き取りの問題，各５問。全て既習範囲の文法事項及び単語で答えられるようにした。本文とポイントで学んだ内容の確認のみを目標とし，多くのテキストで行われている練習問題で語彙を増やすというやり方は採らなかった。

3．3 『中国語Ⅱ』の構成

全て場面別に構成した。配列は以下の通り。

第一課 访问中国 ―― Fǎngwèn Zhōngguó
・ポイント・1．名前の呼び方 2．状態補語 3．"是……的"

第二課 上课 ―― Shàngkè
・ポイント・1．結果補語 2．可能補語 3．動詞の重複形式 4．授業中の慣用表現

第三課 问路 ―― Wèn lù
・ポイント・1．方位詞 2．時間の尋ね方，言い方 3．距離の尋ね方，言い方 4．概数の言い方

第四課 买东西 ―― Mǎi dōngxi
・ポイント・1．お金に関する表現 2．"有点儿"と"一点儿" 3．目的語を2つ含む文

第五課 打电话 ―― Dǎ diànhuà
・ポイント・1．"動詞＋去" 2．"叫"の用法 3．"一"の省略 4．電話番号などの尋ね方，言い方

第六課 自我介绍 ―― Zìwǒ jièshào
・ポイント・1．兼語式文 2．文を目的語に取れる動詞 3．"在"の用法

第七課 在饭馆 ―― Zài fànguǎn
・ポイント・1．疑問詞の不定用法 2．"来"の用法 3．重さや長さの単位

第八課 看病 ―― Kànbìng
・ポイント・1．介詞"把" 2．方向補語 3．離合動詞 4．重複形式からなる副詞

第九課 爱好 ―― Àihào
・ポイント・1．様々な介詞 2．「……でも」「……すら」の表し方 3．呼応表現(1)

第十課 谈中国 ―― Tán Zhōngguó
・ポイント・1．接続詞 2．大きな数字の言い方

第十一課 告别 ―― Gàobié
・ポイント・1．近い未来の表し方 2．"给"の用法 3．"让"の用法 4．禁止の表し方

第十二課 书信 ―― Shūxìn
・ポイント・1．補語"极""死""多" 2．呼応表現(II) 3．"祝……"の表現

現実の生活で出会う場面を１２個選んだ。特に第３，４，５，７，８課は実際の生活を行うときすぐにでも必要となるものである。また対話以外で出会うことの多い自己紹介やスピーチの仕方，手紙の書き方を学ぶ課に第６，１２課をあてた。

各課はそれぞれ「本文」「新出単語」「ポイント」「練習」「関連単語」の５つの部分からなる。「ポイントの新出単語」が「関連単語」に変わっている以外は全て『中国語Ⅰ』と同じ。本文は第６，１２課以外は全て５対話からなる。『中国語Ⅰ』同様全てピンインを施した。新出単語の取扱いも『中国語Ⅰ』と同じ。「ポイント」は文法説明と各場面に関係する表現の二本立てとし，文法説明では主に『中国語Ⅰ』で説明しなかった「二重賓語文」「兼語式文」「補語」「複文」等を取り上げた。但しいずれも簡潔な説明にとどめ複雑な内容には触れていない。これも実際の会話での運用を重視しているからである。「ポイントの新出単語」に代えて「関連単語」を置いたのは次の２つの理由による。

１．外国語の学習に於いて辞書を引く練習は必要である。

２．実際に各場面での会話を行う場合には本文で出てくる以上の単語が必要である。

そこで，ポイントの新出単語については説明を施さず，学生が辞書を引いて語の意味等を確認する対象とし，代わりに各場面に関連する単語を２０個前後並べることとした。「関連単語」も

含めると『中国語Ⅱ』の単語数は合計５９７語。各課平均５０単語程度になった。

「練習」の内容，形式は『中国語Ⅰ』と同じ。

４．実際の授業

最後に『中国語Ⅰ』を用いて筆者が行っている実際の授業の方法について述べて，この報告を締めくくることにする。

授業は毎回ほぼ同様に行われる。教室に入ってまず名札を教卓の上に置く。名札は縦１０センチ横３０センチ程度のもので，筆者の姓名が漢字とピンインで書かれている。学生達の机の上にも同様の名札が置かれている。この名札は第３課の練習問題をする際，宿題として作らせたものである。その時には名札を皆に見せながら“我姓□□，我叫□□□□．”と全員に自己紹介してもらい，全員でそれぞれの姓名を復唱した。これ以降教室内では全員中国語で姓名が呼ばれることになり，その手助けとして名札が机の上に置かれている。名札を忘れた学生に対しては，質問する度に“你叫什么名字？”と尋ねるため，ほぼ全員が持って来るようになった。“你们好！”と挨拶した後で，数人の学生に中国語で簡単な質問をしながら全員にＢ６大の紙片を配布する。紙片は聞き取り用のもので，前の課の内容の中から文を５つ，単語を５つそれぞれ読み上げる。大体初めに３回ずつ，最後に通して２回ずつ読み上げる。学生達は聞き取った文の中国語と日本語訳，単語の中国語とピンイン表記を記す。読み終えると，黒板に正解を記し，学生達はその場で訂正する。訂正がほぼ終わった頃，黒板に記した正解を２回ずつ一斉に音読する。授業の最後にこの紙片を回収する事になっているため，学生の入室がこれより遅れることはまずない。続いて前回学習した課の本文の日本語訳（Ｂ紙に２色のマジックを用いて記したもの。４０人程度のクラスなら最後列の学生でも読み取れる。）を黒板に張り出し，それを参考に本文を一斉に暗唱する。時間に余裕があれば，本文を教室の右半分と左半分，学生全員と筆者との対話の形で暗唱する。ここまで大体２０分。

復習が終わった後は，ピンイン音読の練習を兼ねて，「新出単語」と「ポイントの新出単語」を学生一人一人指名して発音させる。発音の訂正をした後で一斉に音読する。テキストに単語の品詞と意味が記されているので，単語についての解説は殆どしない。今年度担当のクラスは学生数がほぼ４０人なので，大体毎回１つずつ新出単語を読むことになる。大体１５分から２０分。

次に「ポイント」を学習する。テキストに記されている説明は要点を記しただけなので，黒板に簡単な例文を記しながら各ポイントの文法事項を具体的に説明する。その後で，テキストに記されている例文を学生に１人１文ずつ音読，翻訳させる。発音の訂正，翻訳の訂正をし，一斉に音読する。発音はほぼ全員について訂正するが，翻訳は正しくできるので普通は訂正しない。次に例文または例文に少し手を加えた文を使って学生に質問し，中国語で答えさせる。各ポイントについて同様に進め，全体で２０分から３０分。

次に本文を学生に１人１文ずつ音読，翻訳させる。発音，翻訳の訂正をするが，ポイントの時

と同じように翻訳の訂正は殆ど必要ない。訂正の後，各文ごと一斉に音読し，最後に通して一斉に音読する。一通り終わると，本文の日本語訳を黒板に張り出し，その日本語訳を見ながら一斉に数回音読する。次に２人ずつペアになって本文を音読させる。この際出来るだけ黒板を見て対話するように指示する。この間教室を巡回しながら個別に発音を訂正したり疑問点に答えたりする。大体１／３ぐらいの学生は殆どテキストを見ることなく対話しているが，残りはテキストと黒板を交互に見ている。時間に余裕があれば，数組の学生を指名し，前に出て黒板を横目に見ながら対話させる。

授業時間残り数分になった時点で，各ペアでの対話を切り上げ，教室の右半分と左半分との対話，筆者と学生達との対話の形で本文を暗唱する。それぞれ本文のＡ（問）とＢ（答）の役割を交代して２度ずつよむが，筆者と学生達との対話の後半，筆者がＢを読む時には，テキストに書かれているのとは少し違う言葉，内容で応対する。肯定の答を否定に読んだり，単語を少し入れ換えたりするだけだが，学生には本当の対話が行われた様な印象を与えることが出来る。

最後に初めに行った聞き取りの紙片と宿題を提出させ，同時に前回提出した宿題を返却する。宿題はカセットテープに本文とポイントの全ての中国語と練習問題の答を録音することで，毎回提出することを義務づけている。提出したカセットテープは次回授業時にコメントを付けて返却する。週２コマ制の時には，夏休み，冬休みの宿題として既習範囲の本文だけをカセットテープに吹き込んで提出させていたが，現在は毎週ポイント，練習も含めて提出させている。週１コマ制の中でどうやって学生が中国語を学習する時間を増やすか一つの試みとして行ってみたが，回を追うごとに確実に上達しており，学習効果もかなり期待できるものであることが分かった。しかし，毎週１クラスにつき４０人分のテープを聞きコメントを記すのはかなり骨の折れる仕事であるのも間違いない。

５．おわりに

週２コマの頃は中国語に触れる機会が週２回あったが，週１コマになって週１回になった。この差は予想以上に大きい。祭日等で授業が休みになると２週間丸ごと休みになってしまう。週１コマ用のテキストを作りそれを実際に用いて実感したのが，結局のところ授業そのものの中身よりも，授業以外にどれだけ中国語に触れさせるかということが週１コマ授業のポイントなのだということである。しかもそれは口と耳を通してのものであること。授業時間内では理解させることは出来ても体得させることは出来ない。週４コマ程度あれば別だが，絶対的に時間が足りない。結局は授業で理解し自己学習で体得するという形でしか進んで行かないのではないだろうか。週１コマ１単位から２単位への変更は教室学習中心から自己学習中心へシフトしたことを意味するのであるから，今後は授業そのものは自己学習を自発的にあるいは強制的に行わせるための補助的な存在と位置づけるべきなのであろう。[5] 当然テキストもこの点を踏まえて編集されるべきであろう。その意味では『中国語Ⅰ』『中国語Ⅱ』は必ずしも合格とは言えない。

注

1) 白帝社　１９９４。

2) 同テキスト編集の過程で生じたピンイン表記上の問題点については小川郁夫「中国語の拼音表記について《漢語拼音正詞法基本規則》をめぐって」『名古屋大学中国語学文学論集７』（１９９４）で報告した。

3) 一般教育改革の検討を進めるにあたり英語以外の外国語科目担当者数名で合同調査した。「何に力を置いた授業が望ましいか（複数解答可）」の問に対する中国語受講者（調査対象１２０）の解答は，「話す力」６８，「聞く力」４９，「総合能力」３４，「読む力」２４，「書く力」９，「その他」１であった。また１９９３年４月と１９９４年２月にも，平成５年度教育方法改善プロジェクト「第二外国語の教育効果の分析と授業の改善」代表者，浦井康男（ロシア語）の一環として，英語以外の外国語受講者に対するアンケートを行った。９４年２月のアンケート（中国語受講者解答数２８８）ではほぼ同じ問に対して解答は，「話す力」１５０，「聞く力」９２，「外国文化との接触」８２，「読む力」６３，「総合能力」５４，「書く力」２０，「その他」２であった。９３年４月のアンケート（中国語受講者解答数３３５）では「どんなところに力点を置いて学習しようと思うか」という問に対して手違いで重複番号にしてしまった「話して意志を伝えられる能力」と「聞き取りの能力」を答えたものが１７６であった。

4) 実際の授業ではそれぞれのグループごとに音節表に従い学生一人一人の音読，一斉音読を行ったので第２課には２回の授業時間が必要であった。

5) 大学設置基準によれば，週１コマ１単位とは，２時間（１コマ）１５回の授業，計３０時間の授業学習に１５時間の自己学習を合わせた合計４５時間の学習に対して１単位が与えられるということであり，週１コマ２単位とは，２時間（１コマ）１５回の授業，計３０時間の授業学習に６０時間の自己学習を合わせた合計９０時間の学習時間に対して２単位が与えられるということである。前者では授業１コマにつき１時間の自己学習，後者では１コマにつき４時間の自己学習が要求されることになる。従来の基準では外国語科目の演習は１コマ１単位と決められていたが，大綱化により２単位でも良いことになり，本学では９３年度から１コマ２単位としている。

Production of a 1-Lesson-a-Week Textbook for Chinese as a Foreign Language

MURAKAMI Kimikazu

Key words: Chinese Language Education, Textbook, Chinese as a Foreign Language